

## 読むことのデモクラシー —— *Lolita* のリベラルな想像力をめぐって

後 藤 篤

### 序——Nabokov と Trilling

ニューヨークのリーダーズ・サブスクリプション社の定期購読者向け雑誌 *Griffin*（1958年8月号）に掲載されたのち、ロンドンの文化系批評誌 *Encounter*（1958年10月号）に転載された“The Last Lover”と題する書評において、Lionel Trilling は Vladimir Nabokov の *Lolita*（1955）に向けられた不審の眼差しを払い除けるべく、本作の主題がエロチックな性愛ではなくロマンチックな恋愛にあると喝破した。小説が愛を囁くことをやめ、セックスについてしか語ることができなくなった時代——そのように現代を捉える Doni de Rougemont の議論を踏まえた Trilling 曰く、*Lolita* は Shakespeare 劇や Tristan 物語から Lev Tolstoy の *Anna Karenina*（1877）に至るまで、ヨーロッパ・ロシア文学を貫く情愛の伝統を相手取った“emotional archaeology”と見なしうる（18）<sup>1</sup>。

ところで Nabokov が 1940 年代末から約 10 年間教鞭を執ったコーネル大学での同僚である M. H. Abrams の回想によれば、*Lolita* の作者が *The Liberal Imagination*（1950）で一世を風靡したニューヨーク知識人を代表する論客と初めて顔を合わせたのは 1958 年 3 月、後者がイサカに招聘された際に催されたパーティーでのことだった。かねてより相手が陰口を叩いているとの噂を小耳に挟んでいた Nabokov は、挨拶もそこそこに挑発的な態度を取ったという。“I understand, Mr. Trilling, you don't like my little *Lolita*.” この平手打ちにたじろいだ批評家は、“No, that isn't true. What I've said is that I'm putting off the rereading of it until this summer, when I have time *really* to come to grips with it”と必死に言い抜けを図ったらしい（Cornell Colleagues 221）。その後、まさしく *Lolita* を真剣に読み解いた証として“The Last Lover”を書き上げた Trilling は、1958 年 11 月末にカナダのテレビ局〈クローズアップ〉が企画した番組で Nabokov と対峙することになる。ニューヨークのロックフェラーセンターのスタジオにて、司会の Pierre Burton を挟んで行われた対談は、Nabokov の自宅のリヴィングルームを再現したセットで撮影された（Boyd 374）。

インデックスカードに取ったメモを片手にアドリブでたどたどしく喋る小説家と、煙草の煙をくゆらせ、時おり笑顔をまじえる余裕の表情で舌鋒鋭く持論を練り広げる 6 歳年下の批評家。

Burton に促されて “The Last Lover” の主張を繰り返した Trilling に対して、Nabokov は *Anna Karenina* が描く Kitty と Levin の関係性を引き合いに出し、それが欧米の一般的な結婚生活においては情愛とも相思相愛とも名付けられると語ってはいるものの、それを受けて Tolstoy の小説が Anna と Vronsky の関係を主軸に持つとする対談相手の切り返しを受け損ねた挙句、“I would put it this way, that if sex is the sermon made of art, love is the lady of that tower” などと韜晦に逃げてしまう (Burton 14)。全体を通じて Nabokov と Trilling の会話はどうもうまく噛み合っておらず、傍から見ればこの番組には、*Lolita* というよりはむしろ “The Last Lover” のためのプロモーション映像といった感さえ漂う<sup>2</sup>。

だがこの対談が実現するよりも先に、Nabokov の想像力は Trilling の政治思想とのヴァーチャルな対話を試みていたのではなかったか。一人の少女を我が物とし、その自由を侵害した唾棄すべき小児性愛者の自由は担保されるのか——そのような個人の尊厳をめぐる作者の思考実験の記録としての側面を持つ *Lolita* の物語は、赤狩りの時代に書かれた変則的な政治小説として、その脱稿に3年先立つ Trilling の主著に浮かび上がるリベラルな想像力の裏側を照らし出していたとも考えられるだろう (Dragunoiu 141)。かつて Thomas Hill Shaub が *American Fiction in the Cold War* (1991) において明快に描き出したリベラル・ナラティブ、すなわち1939年の独ソ不可侵条約の締結によって共産主義への幻滅を経験した Trilling らの転向の物語との関連において、己の改心を読者にアピールしてやまない *Lolita* の主人公兼語り手である Humbert Humbert の物語を再読すること。それは冷戦期アメリカ思想史が織り成す星座のなかに、亡命知識人としての Nabokov の文学芸術と表裏一体をなす彼の政治信条が煌めく位置を探すことでもある。

## 1. 猿の前肢

そのための作業仮説たる本稿の議論を軌道に乗せるにあたり、“The Last Lover” において Trilling が *Lolita* の物語を Humbert の “moral evolution” の過程と捉えつつ、“his ascent from ‘ape-like’ lust to a love which challenges the devils below and the angels up over the sea to ever dissever his soul from the soul of the lovely Annabel Lee constitutes the life-cycle of the erotic instinct” と論じていたことを思い出そう (19)。ダーウィニズムを想起させるこの指摘が Edgar Allan Poe への引喩の可能性を暗示して以降、*Lolita* が “Annabel Lee” (1849) を下敷きに描かれているという見方は批評史的な通説となって久しい。のみならず *The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket* (1838) や “William Wilson” (1839)、“The Fall of the House of Usher” (1939) をはじめとする数々の Poe 作品の断片が *Lolita* のテキストに織り込まれていることについては、作者自身の監修のもと本作に膨大な註釈を施した Alfred Appel, Jr. が詳らかにするところである (AL 328-32n.9/2)<sup>3</sup>。

したがって次に引く一節もまた、そうした *Lolita* における Poe の遍在を示す一例と見なすことができるだろう。

She was twice Lolita's age and three quarters of mine: a very slight, dark-haired, pale skinned adult, weighing a hundred and five pounds, with charmingly asymmetrical eyes, an angular, rapidly sketched profile, and a most appealing *ensellure* to her supple back—I think she had some Spanish or Babylonian blood. I picked her up one depraved May evening somewhere between Montreal and New York, or more narrowly, between Toylestown and Blake, at a darkishly burning bar under the sign of the Tigermoth, where she was amiably drunk: she insisted we had gone to school together, and she placed her trembling little hand on my ape paw. (AL 258)

文脈を確認しておけば、2度目の全米旅行中に忽然と姿を消した Lolita こと Dolores Haze の行方を追う Humbert は、ここで言われる「彼女」すなわち Rita という名の成人女性と出会い、しばらく生活を共にする。上記引用の前半に見られる外見描写を鑑みるに、この時期の Humbert はニンフェットの魔法から目覚めたかのように見える。数ヶ月後、結婚を経て今やニンフならぬ妊婦となった Dolores から手紙が届くやいなや、物語は宿敵 Clare Quilty 殺害の場面に向かって加速していくわけだが、この引用箇所が含まれた第2部第26章は、そうした急展開を目前に控えた風の状態にある。小説の本筋とは無関係とも思える些細なエピソードが連続しているせい、先行研究において同章はほとんど顧みられてはこなかった。

ここで注目すべきは、Rita の「震える小さな手」が、Humbert が言う「我が猿の前肢」に置かれたという描写である。この場面以外でも Humbert は、自らの毛深い容貌を時おり猿に喩えている (AL 39, 48; 360n.48/2)。この動物イメージが重要なのは、それが本作の着想と深く関わっているからだ。小説のあとがきとして書かれたエッセイ“On a Book Entitled *Lolita*” (1957) のなかで、Nabokov は次のように執筆の契機を述懐していた。

The first little throb of *Lolita* went through me late in 1939 or early in 1940, in Paris, at a time when I was laid up with a severe attack of intercoastal neuralgia. As far as I can recall, the initial shiver of inspiration was somehow prompted by a newspaper story about an ape in the Jardin des Plantes, who, after months of coaxing by a scientist, produced the first drawing ever charcoaled by an animal: this sketch showed the bars of the poor creature's cage. (AL 311)

研究者たちの懸命な努力にも関わらず、くだんの新聞記事は今なお正式な発見には至っていない。こうした *Lolita* の原風景を作者一流の作り話として捉える通説に従い、ここでは先に挙げた Humbert の手の描写にちなんで、上記引用箇所をまさしく猿が重要な役割を担う Poe の“The Murders in the Rue Morgue” (1841) への引喩として捉えてみよう<sup>4</sup>。

Humbert の投獄の理由は作中で明確に述べられてはいないが、彼が犯した罪は大きく分けて

二つある。一つ目は言うまでもなく殺人であり、Hubertはその「猿の前肢」でもって銃の引き金を引くことでQuiltyを亡き者にする。そして二つ目は、Doloresに対する彼の振舞いだ。義理の娘となった彼女と全米を旅行するなか、性的関係を強要し、その子ども時代を近親相姦の悪夢へと変貌させた彼の手には、L'Espanaye 母娘を惨殺したあのオランウータンにも引けを取らない残酷さが認められる。Poeの物語の語り手は、探偵August Dupinの説明を聞きながら、尋常ではない握力で女性を絞殺した犯人が「人ならざる手」の持ち主だと述べていた（Poe, *Short Fiction* 193）。この形容は、自らの性的欲望に囚われるあまり、まさしく人の道を外れたHumbertの手——その「猿の前肢」にこそ相応しい。

その音の響きから「Poeを真似る」という意味にも聞こえる“ape paw”というフレーズを、物語の随所でPoeの模倣を繰り返す広げる*Lolita*という小説のメタフィクション的な自己言及として捉えること。*Lolita*の英語原文と作者自身が手掛けたロシア語翻訳（*Lolita*, 1967）に見られる異同に目を向けることで、この解釈の裏を取ることができるだろう。英語圏の文学や文化事象に不案内な読者が念頭に置かれた自作翻訳では、原文では暗示に留められた引喩が明示的に書き換えられていることが少なくない。実は“my ape paw”という部分も、「我がオランウータンの前肢に（moyu orangutanovuyu lapu）」へ変更されているのである（316）。ロシア語で「前肢（lapa）」もしくはその対格形である「前肢に（lapu）」と書いても、“The Murders in the Rue Morgue”の作者と同じ響きを持つ英語の“paw”と同様の効果は得られない。だからこそNabokovはHumbertの手をより具体的な動物イメージで喩えることで、Poeとの文学的な結び付きを維持せんと努めたのである。

## 2. Eliot から Humbert へ

さてNabokov自身の手になる*Lolita*のロシア語翻訳でこの第2部第26章の一節をよく見ると、英語原文では「ある墮落した五月」とだけ書かれていた箇所が引用符に括られ、直後に「Eliotが言うように（kak govorit Eliot）」という挿入句の加筆が認められる（316）。そもそも英語原文では“Toylestown”という架空の地名が詩人のフルネームのアナグラムになっており、「ある墮落した五月」というフレーズの出典がT. S. Eliotの“Grontion”（1920）であることが暗示されていた<sup>5</sup>。*Lolita*におけるEliotへの引喩としては、他にもHumbertがQuiltyに有罪を宣告するために書き上げたナンセンス詩を挙げることができる。“Because you took advantage of a sinner / because you took advantage / because you took / because you took advantage of my disadvantage ...”と始まるその詩は、“because”を技巧的に反復していることからして、明らかにEliotの“Ash Wednesday”（1930）の焼きなおしだった（AL 299; 448n.299/1）。

Alvin Tofflerが1963年に行った*Playboy*のためのインタビューのなかで、Nabokovは“I was never exposed in the twenties and thirties, as so many of my coevals have been, to the poetry of the not quite first-rate Eliot and of definitely second-rate Pound”と明かしている（SO 43）。この批判は、1949年5月21日付で*Partisan Review*誌のPhilip Rahvに送られた手紙の一節と

響き合っている。というのも、そこには“I am sorry you did not ask me what I think of the disgusting and entirely second-rate Mr. Pound,—and Mr. Eliot who is also disgusting and second-rate”と綴られていたからだ (SL 93)。この文脈においては、同年3月31日付で *The New York Times Book Review* の編集者に宛てた手紙を“I shall be glad to do an occasional review for you”と始めた作家が、続けて“I have been wanting for a long time to take a crack at such big fakes as Mr. T.S. Eliot and Mr. Thomas Mann”と語っていたことも見逃せない (SL 90-91)。

加えて、アメリカ時代の盟友たる Edmund Wilson に宛てた1958年5月24日付の手紙を“Your piece on Toile, T. S. is absolutely wonderful”と書き出した Nabokov は、*A Literary Chronicle: 1920-1950* (1956) に収録された“T. S. Eliot and the Church of England”に惜しめない賛辞を贈りつつも、“I realize that you still think a lot of him as a poet, and disagree with you when you say that his verses lodge in one’s head (they never did in mine—I always disliked him)—but you have pricked a ripe amber pimple and from now on, Eliot’s image will never be the same”と、例によって嫌悪感を露わにした (NWL 360)。*Lolita* との関連においては、Nabokov が1950年4月17日付で Wilson に宛てて“Have been looking through Eliot’s various works and reading that collection of critical articles about him and am now more certain than ever that he is a fraud and a fake (even worse than ridiculous Thomas Mann—and with more brains)”と述べていたことも見逃せない (NWL 263)。つまり作者は *Lolita* の執筆に本腰を入れ始めた時期に、Eliot 関連の文献に集中的に目を通していたのである<sup>6</sup>。

かくも執拗に Eliot を口撃する Nabokov は、なぜ彼にとっての唾棄すべき詩人の言葉を *Lolita* のうちに取り込んだのだろうか。この問いに答えるためには、Eliot が他ならぬ Poe と密接に結び付いた作家であったことを思い出す必要がある。Eliot の詩行の背後に Poe の影が見え隠れすることについては、先行研究においてしばしば論じられてきたところである<sup>7</sup>。例えば *Lolita* と同時期に発表された Grover Smith の *T. S. Eliot’s Poetry and Plays* (1956) では、“Sweeny Erect” (1919) の一節から“The Murders in the Rue Morgue”のオランウータンが剃刀を振りかざす姿が思い出されることが指摘されていた (47, 254, 319)

こうした Poe に対する Eliot の関心が最も顕在化する場所は、“From Poe to Valéry” (1949) をおいて他にはない。同評論における Eliot の目的は、Charles Baudelaire から Stéphane Mallarmé、そして Paul Valéry へと続く、Poe に魅了された3世代のフランス詩人たちを論じることにあったが、その冒頭には Poe からの影響を自問する様子が窺える (Eliot 27)。“From Poe to Valery”から *Lolita* に目を向けなおすとき、Humbert の“Reader! Bruder!” (AL 262) という呼びかけに響く文学史的な倍音は決して聞き逃すことができない。なぜなら、Humbert が *Le Fleurs du mal* (1857) の冒頭を飾る *Au Lecteur* の最終行 (“—Hypocrite lecteur, —mon semblable, —mon frère!”) から借用したこの表現は、第1部“The Burial of the Dead”の末尾にこの Baudelaire の詩行をそのまま埋め込んだ Eliot の *The Waste Land* (1922) への引喩でもあ

るからだ（AL 436n.262/1）。

Poeのうちに自らが理想とする詩人の姿を見出したBaudelaireを気取るHumbert。彼の読者に対する呼びかけは、フランス象徴主義詩人の仕事を經由しつつ、本国アメリカの戦後文学批評において先陣を切ってPoeの再評価を試みたEliotのパロディも含意する。つまり*Lolita*とは、Poeに対して語りかけているように見せながら、実のところPoeからBaudelaireを経てEliotへと至る系譜、すなわちPoeをめぐるアメリカとフランスの文学的な相互干渉の歴史に向けた壮大な対話の試みでもあったのだ。

### 3. NabokovとPoeのロシアの顔

“From Poe to Varl y”のなかでEliotは、従来のPoeの評価をめぐる本国アメリカとフランスの温度差について語っていた（Eliot 31）。そこでBaudelaireらのひそみに倣い、Poeを部分ではなく全体で捉える必要性を説いたEliotを嚆矢として、1950年代のアメリカにおいてはPoe再評価の機運が一気に高まりを見せ始める。その初期段階においては、Eliotに続いてフランス象徴主義文学によるPoe受容の意義が問いなおされた。例えば先に挙げたSmithのEliot論と同年に刊行されたJoseph Chiariの*Symbolisme from Poe to Mallarm *（1956）は、そのタイトルがEliotの“From Poe to Val ry”を意識していることに加え、Eliot自身が序文を寄せていることからして、明らかにアメリカ文学によるPoeの奪還を目論んだ詩人の問題意識を引き継いでいる。

Patrick F. Quinnの*The French Face of Edgar Allan Poe*（1957）もまた、Baudelaireを中心とするフランス文学に見られるPoeの影響を包括的に論じることにより、Eliotの議論を下支えしつつ、その後のアメリカにおける新たなPoe研究の足場を準備した一冊だった。ここで興味深いのは、ChiariやQuinnらアメリカの文学者たちがPoeをフランスから本国アメリカへと取り戻すべく奮闘していた時期が、奇しくも*Lolita*のフランスからアメリカへの逆輸入の準備が整えられていた時期と一致するということだ。Nabokovは執筆中にEliotの著作を読み通すなかで、この大嫌いなモダニズム詩人とPoeとの結び付きを利用することを思い付き、同時代に起こりつつあるPoeのフランスからアメリカへの帰還を自作に書き込むことにしたのかもしれない。

だがNabokovがPoeのうちに認めたものは、そうしたフランスの顔を獲得したのち遙か遠く北の国で生まれたもう一つの顔でもあったはずだ。Joan Delaney Grossmanの*Edgar Allan Poe in Russia*（1973）によれば、“The Gold-Bug”（1843）がフランス語訳からの重訳によって紹介された1847年をもって嚆矢とするロシアにおけるPoeの翻訳受容史は、新たな世紀を迎える頃に一つの山場を迎えた。決定版と呼ぶべきロシア語訳を手がけたKonstantin Bal'montやValery Bryusovら、当時隆盛を極めた象徴主義詩人たちのあいだで、とりわけ詩人として評価されたPoeの作品や詩論が熱烈に歓迎されたのである。Aleksandr BlokやAndrei Belyなど、20世紀初頭に活躍した象徴主義作家たちのあいだで、Poeの審美主義的な芸術観や、詩の意味よりも韻律を重視するその詩学が連綿と受け継がれていった（Grossman）<sup>8</sup>。

Poe がまさしく象徴主義の象徴として神格化されるまでに至った 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時期、ロシア・モダニズムが形成されそして発展を遂げたこの「銀の時代」にこそ、*Lolita* の作者の文学的ルーツが隠されている。Nabokov は 1949 年 1 月 4 日付で Wilson に宛てた私信のなかで、“The ‘decline’ of Russian literature in 1905-1917 is a Soviet invention. Blok, Bely, Bunin and others wrote their best stuff in those days. And never was poetry so popular—not even in Pushkin’s days. I am a product of that period, I was bred in that atmosphere” と、彼にしては珍しく自らの文学的な出自について率直に語っていた (NWL 246)。自らがロシア文学の系譜に連なるという自意識をこの亡命作家が保ち続けたことは、“On a Book Entitled *Lolita*” の末尾を飾る有名な一節にも窺える。

My private tragedy, which cannot, and indeed should not, be anybody’s concern, is that I had to abandon my natural idiom, my untrammelled, rich, and infinitely docile Russian tongue for a second-rate brand of English, devoid of any of those apparatuses—the baffling mirror, the black velvet backdrop, the implied association and traditions—which the native illusionist, frac-tails flying, can magically use to transcend the heritage in his own way. (AL 317)

同エッセイのロシア語版では、ここで用いられた「遺産 (nasledie)」という語に「父たちの (otsov)」という一語が追加された (385)。この翻訳上の変更が示唆する、ロシア文学の「父たち」に向けた Nabokov の意識は、小説本編においては英語原文には見当たらないロシア文学への引喩の増加として現れている。Vivian Darkbloom という登場人物の名称変更は、そのささやかな傍証と見なしうる。作者のフルネームのアナグラムであるこの名前、キリル文字による制限からロシア語版では Vivian Damor-Blok と名付けなおされることにより、先の Wilson 宛の書簡で Nabokov が挙げていた Blok の名前を孕み持つことになった (12)。

こうした Nabokov のロシア語作家としての自意識を踏まえつつロシア語版 *Lolita* を論じた Aleksander Dolinin は、ロシア語に翻訳されることにより、小説に散りばめられた Poe への引喩がロシア象徴主義文学に対する引喩としての意味を持つことになったと指摘する (322)。しかしながら、ロシア文学の「父たち」からナボコフが受け継いだ文学的な「遺産」の一つたる Poe のロシアの顔は、*Lolita* の英語原文のうちに常に既に織り込まれていたと考えることもできるだろう。つまり自らを「奇術師」に準えた作家は、Poe のフランスの顔をめぐって同時代の Poe 批評との間に絶妙な共振関係を結ぶ Humbert の物語を通じて、19 世紀のアメリカを生きた作家の作品に語りかけつつ、それが引き連れるロシア文学史に対しても呼び掛けるという、いわば間テクスト的な二重の対話を繰り返していたのである。

Dale E. Peterson が教えてくれるように、*Lolita* に限らず若書きのロシア語詩から最晩年の英語小説に至るまで、Nabokov の作品には Poe が残した数々の「亡霊的な痕跡」が認められる (95)。

あるいはPoeとの関連において“On a Book Entitled *Lolita*”を読みなおせば、倫理的観点から評説を云々する読者に向けて“I am neither a reader nor a writer of didactic fiction, and [...] *Lolita* has no moral in tow”と言ったのけた作者の態度が、教訓詩を異端として斥けつつ、詩の目的は詩それ自体であるとしたPoeの“The Poetic Principle”（1850）のパロディにすら見えてくる（Poe, *Essays* 71-94; Maddox, *Nabokov's Novels* 76-78; Norman 193-95）。さらに言えば、先にも取り上げたTofflerによる*Playboy*のインタビューでこれと同様の主張を繰り返しつつ、“[...] I shall never regret *Lolita*. She was like the composition of a beautiful puzzle—its composition and its solution at the same time, since ne is a mirror view of the other, depending on the way you look”（SO 20）と自慢げに語っていた作家が、Poeの“Philosophy of Composition”（1846）を意識していた可能性はなきにしもあらずだ（Poe, *Essays* 13-25）。

とはいえNabokovは公的な場で必ずしもPoeについて多くを語ってはおらず、数少ない直接的な言及を含んだ上の*Playboy*インタビューの発言にしても、実際その態度は要領を得ない。なぜなら、そこでNabokovは祖国ロシアで過ごした10代の頃に夢中になった作家の一人としてPoeの名前を挙げてはいるものの、それと同時に20歳から40歳までの時期、すなわちヨーロッパ亡命時代を経たあとでは、Poeを含む数名の作家たちにかつての魅力を感じなくなったとも述べているからだ（SO 42-43）。“[A] writer might parody another writer to become free of his spell and thus able to write his own novels”とMarcel Proustの言葉をパラフレーズしたTony Tannerは、“Just so we could see Nabokov keeping at bay, for example, Poe and Dostoevsky, in *Lolita*”とも論じる（38）。先行作家に対して一定の距離を保とうとするかのようなNabokovの身振りは、いわゆる影響の不安のシナリオを当てはめるにはお誂え向きだろう。しかしながら、従来の議論に倣ってNabokovとPoeをアプリアリに直結させるだけでは、両者を結ぶ文学史の線を複数のモダニズムの軌跡との交錯のうちに捉えることはできない。

## 結——読むことのデモクラシー

ここまでの議論を踏まえたとき、*Lolita*の英語原文に見られたあの「猿の前肢」というフレーズが、草稿段階ではまた別の形を取っていたという事実は重要な意味を持つだろう。校正作業が佳境に差し掛かった1955年7月、オリンピア社のMaurice Girodiasが受け取った修正指示のリストには“ape's”から“ape”への変更が含まれていた（SL 170）。父親と同じく多言語使用者であり、時には作家の自作翻訳の共訳者を務めたこともあった一人息子のDmitri Nabokovによれば、“ape paw”とした方がロシア語で「猿の前肢」と言ったときのイメージや語感に近く、また直前に置かれた“my”との結び付きへの配慮から所有表現の重複を避けるために、最終的にはより英語らしい表現である“my ape paw”という形に落ち着いたという（SL xii-xiii）。つまりこのPoeへの引喩は、Nabokovが*Lolita*を英語で執筆する際にロシア語で思考していた痕跡でもあったのだ<sup>9</sup>。

Nabokovにおける言語の問題がPoeと密接に結び付いた記述は、*Lolita*の次作に当たる*Pnin*

(1957) の冒頭にも見つかる。主人公 Timofey Pnin はアメリカの大学で教鞭を執る亡命ロシア人だが、幼少期から英語そしてフランス語に堪能であった作者とは異なり、残念ながら語学の才能に恵まれていない。“A special danger area in Pnin’s case was the English language” (14) とは同作の語り手の弁だが、1940年の渡米直後のPninの語彙は非常に限られたものだった。ここで注目すべきは、“Except for such not very helpful odds and ends as ‘the rest is silence,’ ‘nevermore,’ ‘weekend,’ ‘who’s who,’ and a few ordinary words like ‘eat,’ ‘street,’ ‘fountain pen,’ ‘gangster,’ ‘Charleston,’ ‘marginal utility,’ he had had not English at all at the time he left France for the States” (14) という文章の前半のうちに、Poeへの引喩が凝縮されているということだ。

Hamletの有名な台詞である“the rest is silence”は、Shakespeare俳優を両親に持ち、“Silence”と題する詩を1837年に、そして同じタイトルの短篇小説を1838年に物したPoeに向けた引喩でもある<sup>10</sup>。“nevermore”が“The Raven”(1845)のリフレインであることは言うに及ばず、続く“weekend”は“Three Sundays in a Week”(1841)を念頭に置いたものだろう。この引用箇所が含まれる第1章第1節において、講演旅行に出かけたPninは列車を乗り間違えている。それというのも、彼が持っている時刻表が5年も前のものだったからだ。つまり、ここでPninは新旧の列車の時刻のずれを生きているわけだが、このモチーフは、時差を利用して1週間のうちに日曜日を3度経験する登場人物を描いたPoeの作品と共通している。“who’s who”というフレーズは、同一単語の分身関係を示唆するその字面からして、明らかに“William Wilson”を意識したものだ。

かくも複雑に入り組んだ引喩の意図は、Pninが渡米以前からPoeやShakespeareといった英米文学に慣れ親しんでいたという物語内事実を仄めかすことにあったと考えられる。*Pnin*発表の翌年、つまりパトナム版*Lolita*の出版年にあたる1958年の春、コーネル大学の現代芸術祭で行われた“Russian Writers, Censors, and Writers”と題する講演においてアメリカ人の聴衆の前に立ったNabokovは、あらゆる言説が共産主義イデオロギーに回収され、帝政ロシアの検閲制度が復活したかのように文学が不自由を被るソヴィエトの現状を痛烈に批判した。曰く、芸術家の自由を騙る欺瞞がVladimir Leninのみならずナチス・ドイツの文化相Alfred Rosenbergの発言にも見つかることからして、ファシズムとボリシェヴィズムは実質的には文学に対して同様の態度を取っている(*Lectures* 7)。次に引くのは、同講演の結び近くの言葉である。

The Russian reader in old cultured Russia was certainly proud of Pushkin and of Gogol, but he was just as proud of Shakespeare or Dante, of Baudelaire or of Edgar Allan Poe, of Flaubert or of Homer, and this was the Russian reader’s strength. I have a certain personal interest in the question, for if my fathers had not been good readers, I would hardly be here today, speaking of these matters in this tongue. I am aware of many things being quite as important as good writing and good reading; but in all things it is wiser to go directly to the

quiddity, to the text, to the source, to the essence—and only then evolve whatever theories may tempt the philosopher, or the historian, or merely please the spirit of the day. (11-12)

これに続けて“Readers are born free and ought to remain free” (12) と力強く主張する Nabokov にとって、ロシア文学のみならず Poe を含めた欧米文学を読む自由が保障されていること、いわば読むことのデモクラシーこそ、彼がリベラルな「父たち」から受け継いだ最大の思想的遺産だった。Dana Dragunoiu も言うように、Nabokov の小説は“an echo chamber in which the politics of his Russian past resound” (27) といった趣を持つ。1966 年に行われた *The Paris Review* のインタビューのなかで、Nabokov はおもむろに高名な政治家であった父親が“an old-fashioned liberal”であったとして、“I do not mind being labeled an old-fashioned liberal” と言い放った (SO 96)。Pnin で用いられた表現を借りて言えば、作者もまた主人公と同じく“antikvarniy liberalism” (72) を胸に、“a democracy of ghosts” (136) を信じていたのである。

ロシア革命とそれに伴うソヴィエトの誕生は Poe が描いた不吉な大鴉のごとく、帝政ロシアが「もはやない」ことを宣言した。それに伴い国外へと脱出した Nabokov あるいは Pnin のような亡命ロシア人たちは、非ロシア語圏に渡ることによって、いわば母国語の「沈黙」を強いられることとなる。ボリシェヴィキが国語を改定し、帝政期には一般的に用いられたいくつかの文字を廃止したのは、革命の翌年にあたる 1918 年だった。自らが慣れ親しんだ文字のみならず、その文学をもソヴィエトに奪われた Nabokov が、密かに国外へと持ち出した祖国ロシアの文学的かつ政治的な遺産。*Lolita* のテキストの裏側に彼が言う「教養のある古いロシア」と Poe との関係性を透かし見るとき、そこには英語、すなわち Pnin で言われるところの“the language of Fenimore Cooper, Edgar Poe, Edison, and thirty-one Presidents” (14) で書くことを選んでもなお Nabokov が捨てることのなかった、彼自身のロシアの顔が浮かび上がってくる。

\* 本稿の一部は、日本アメリカ文学会関西支部 2014 年度 7 月例会シンポジウム「恐怖の君臨——盗品／商品／複製としてのポー」(2014 年 7 月 5 日、於近畿大学) における報告「密輸された遺産——ナボコフとポーの「ロシアの顔」」、および、大阪大学言語文化学会・言語社会学会 2015 年度秋季合同研究発表会 (2015 年 10 月 22 日、於大阪大学豊中キャンパス) における研究発表「『ロリータ』と戦後アメリカ文壇——ポーとの間テクスト的対話をめぐって」にもとづく。第 2・3 節の執筆にあたっては、拙稿「奇術師の「ダブル・トーク」——ポー、ロシア・モダニズム、ナボコフ」(『ポー研究』、日本ポー学会、第 5・6 号、2014 年 3 月、18-27 頁) の内容を大幅に加筆修正して利用したことをお断りする。Nabokov の著作からの引用にあたっては、括弧内のノンブルの前に以下のタイトルの略記を添えて記す。AL (*The Annotated Lolita*)、NWL (*Nabokov-Wilson Letters*)、SL (*Selected Letters*)、SO (*Strong Opinions*)。

## 註

1. “The Last Lover” の参照にあたっては *Encounter* 版を使用した。なお Trilling の死後に *Speaking of Literature and Society* (1980) に収録された同書評は、*Encounter* 版に著者自身が微妙な書き直しを施したものである (322n.1)。両者の相違点については de la Durantaye 7-8 を参照。
2. この対談の映像は以下の URL で視聴できる。https://www.cbc.ca/player/play/2472331624. *Think, Write, Speak* (2019) には Deter E. Zimmer が個人的に文字起こしをした同番組のテキストの断片が収録されているが、そこで “the servant maid of art” (252) とされる箇所は、映像の音声を確認するかぎり誤記であろう。
3. “Morella” (1835) や “Ligeia” (1838)、“Eleonora” (1842) を経て Poe が到達した美女再生譚的ゴシック・ロマンスの頂点たる “Annabel Lee” は、「死んでしまった最愛の妻と壊れてしまった恋愛、美しい過去と醜い現実を懸命に宥和させようとする試み」を実現させるべく、「屍体愛好症的なレトリック」が物語の軸に据えられた (巽 70-71)。こうした先行作家のゴシックの想像力が *Lolita* に着実に流れ込んでいる様子は、例えば第 1 部第 13 章の悪名高きカウチのシーンにおいて Dolores を膝に乗せながら一人絶頂に達した Humbert が、続く第 14 章で意気揚々と語る次の言葉からも窺い知れる。“What I had madly possessed was not she, but my own creation, another, fanciful Lolita—perhaps, more real than Lolita; overlapping, encasing her; floating between me and her, and having no will, no consciousness—indeed, no life of her own” (*AL* 62). *Lolita* におけるネクロフィリアの主題と Poe との結び付きについては、Maddox, “Necrophilia” を参照。
4. この一節に浮かび上がる「檻」のイメージに注目した Appel も論じていたように、Nabokov の小説に散見される「幽閉」のモチーフは往々にして登場人物の唯我論の隠喩としての意味を持つ。初公判を前に獄中で自伝を綴る Humbert の姿は、自らの檻の絵を描いてみせた類人猿と重なり合うだろう (*AL* xxii-xxiii, 453n.311/2)。Tanner は Appel の指摘を踏まえつつ、“in addition his [Nabokov’s] characters might find bars where they had looked for windows, and like the poor ape take these as the necessary limits of reality” との推測のもと、“If anything their bars are all but banished by the almost compulsive resourcefulness of their styles. There is a literary, as well as metaphysical, moral in this and my contention is that American writers have not been slow to see it” と論じる (35-36)。あるいは Michael Wood に倣って、*Lolita* 本編の前に置かれた John Ray, Jr. 博士なる架空の精神分析医の序文を、死後の Humbert の前に聳えるもう一つの「格子」と見なしてもよい (108)。“On a Book Entitled *Lolita*” で Nabokov が言及する新聞記事に対する先行研究の反応については、de la Durantaye 182-85 を参照。
5. “Gerontion” への言及は、これ以前にも第 1 部第 5 章において若かりし頃の Humbert がパリ

在住の亡命者や芸術家、あるいは同性愛者たちと交流するなかで物したとされる“... Fräulein von Kulp / may turn, her hand upon the door; / I will not follow her. Nor Fresca. Nor / that Gull”といったパスティーシュや、第1部第30章でDoloresを我が物にした彼がホテル「魅惑の狩人」の壁画を見ながら妄想に耽る場面で口にする、“Oh you, veteran crime reporter, you grave old usher, you once popular policeman, now in solitary confinement after gracing that school crossing for years, you wretched emeritus read to by a boy!”という呼びかけとして現れる（AL 16, 134; 337n.16/3, 382n.134/1）。ともに語り手が己が犯した過去の罪をモノローグ形式で語るという共通点を持つ両作品を併読するとき、第一次世界大戦に行かなかったと語る“Gerontion”の老人よろしく、第二次世界大戦で戦地に赴くことがなかったHumbertが徴兵拒否を試みていた可能性が浮かび上がる（秋草 63-66）。

6. この手紙と比較的近い時期に書かれた *Conclusive Evidence: A Memoir* (1951) の第16章の草稿においても、書評子に扮したNabokovは3人称形式の自分語りで“such writers as Freud, Mann and Eliot, whom tradition and good manners have taught one to respect together with Lenin and Henry James”をこき下ろし、“He is prone to throw a veritable fit of sarcastic glee when high middle-class critics place the plaster of Mann and Eliot beside the marble of Proust and Joyce”と述べている。続けてCleanth Brooksの *Modern Poetry and Tradition* (1939) を引き合いにEliotの女性表象をけなしたNabokovは、*Cocktail Party* (1950) が“Zootism, Existentialism, Titoism”と同類であるとし、イギリスに帰化した詩人を“the Wally Simpson of American literature”と呼んでけなしていた（*Speak, Memory* 251）。
7. EliotによるPoe受容については、McElderly; Patterson 9-42; 出口を参照。
8. ロシアにおけるPoe受容史については、Keefer; Polonsky 97-114; Boyle; Urakovaも参照。
9. 同様の指摘は、作家の多言語性にいち早く注目したGeorge Steinerによって、1960年代末にすでになされている。Nabokovの英語の文章がどの程度ロシア語の影響を受けているのか、あるいは、その英語表現のイメージが、ロシア語の意味上の連想から導き出された「メタ翻訳」となっているのか——こうした疑問を投げかけつつ、ロシア語時代の詩作が英語作家Nabokovの原点にあるとするSteinerは、英語で書かれたNabokovの文章表現それ自体がソヴィエトから密かに国外に持ち出されたものであるという可能性に注目していた（125）。
10. 作家の妻Véraは、ベルリンで亡命生活を送っていた若かりし頃にPoeの詩“Silence”のロシア語訳を手掛けたことがある。同翻訳は亡命ロシア人向け新聞*Rul'* (*The Rudder*) 1923年7月29日号に掲載された際、当時Vladimir Sirinというペンネームで活動していたNabokov自身の“P'esnya” (“Song”) と題するロシア語詩と同じ紙面を飾った（Schiff 9）。

## 参考文献

- Alexandrov, Vladimir E., editor. *The Garland Companion to Vladimir Nabokov*, Garland, 1995.  
 Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The American Years*. Princeton UP, 1991.

- Boyle, Eloise. "Valery Brjusov and Konstantin Bal'mont." *Poe Abroad: Influence, Reputation, Affinities*, edited by Lois Davis Vines, U of Iowa P, 1999, pp. 177-82.
- Burton, Pierre. "Vladimir Nabokov and Lionel Trilling Discuss *Lolita*." *Conversations with Vladimir Nabokov*, edited by Robert Golla, UP of Mississippi, 2017, pp. 10-15.
- Chiari, Joseph. *Symbolisme from Poe to Mallarmé: The Growth of a Myth*. 1956. Gordian, 1970.
- Cornell Colleagues and Others. "Remembering Nabokov." *The Achievements of Vladimir Nabokov*, edited by George Gibian and Stephen Jan Parker, Center for International Studies, Cornell U., 1984, pp. 215-33.
- de la Durantaye, Leland. *Style Is Matter: The Moral Art of Vladimir Nabokov*. Cornell UP, 2007.
- Dolinin, Alexander. "Lolita in Russian." Alexandrov, pp. 321-35.
- Dragunoiu, Dana. *Vladimir Nabokov and the Poetics of Liberalism*. Northwestern UP, 2011.
- Eliot, T. S. *To Criticize the Critic and Other Writings*. Faber and Faber, 1965.
- Grossman, Joan Delaney. *Edgar Allan Poe in Russia: A Study in Legend and Literary Influence*. Würzburg: Jal-Verlag, 1973.
- Keefer, Lubov. "Poe in Russia." *Poe in Foreign Lands and Tongues*, edited by John C. French, Johns Hopkins UP, 1941, pp. 11-21.
- Maddox, Lucy. *Nabokov's Novels in English*. U of Georgia P, 1983.
- . "Necrophilia in *Lolita*." *Centennial Review*, vol. 26, no. 4, Fall 1982, pp. 361-74.
- McElderly, B. R. "T. S. Eliot and Poe." *Poe Newsletter*, vol. 2, no. 2, Apr. 1969, pp. 32-33.
- Nabokov, Vladimir. *The Annotated Lolita*. 1970. Edited by Alfred Appel, Jr. Rev. ed., Vintage, 1991.
- . *Lectures on Russian Literature*. Edited by Fredson Bowers, Harcourt, 1981.
- . *Lolita* [Russian language ver.]. 1967. Vol. 2 of *Collected American Period Works* [*Sobranie sochinenii amerikanskogo perioda*], 5 vols. St. Petersburg: Symposium, 2008, pp. 8-390.
- . *Pnin*. 1957. Vintage, 1989.
- . *Selected Letters 1940-1977*. Edited by Dmitri Nabokov and Matthew J. Bruccoli, Harcourt Brace Jovanovich, 1989.
- . *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*. 1967. Penguin, 2000.
- . *Strong Opinions*. 1973. Vintage, 1990.
- . *Think, Write, Speak: Uncollected Essays, Reviews, Interviews, and Letters to the Editor*. Edited by Brian Boyd and Anastasia Tolstoy, Alfred P. Knopf, 2019.
- Nabokov, Vladimir, and Edmund Wilson. *Dear Bunny, Dear Volodya: The Nabokov-Wilson Letters, 1940-1971*. 1979. Edited by Simon Karlinsky. Rev. and Updated ed., U of California P, 2001.
- Norman, Will. "Lolita's Time Leaks and Transatlantic Decadence." *European Journal of American Culture*, vol. 28, no. 2, 2009, pp. 185-204.
- Patterson, Anita. *Race, American Literature and Transnational Modernisms*. Cambridge UP, 2008.

- Peterson, Dale E. "Nabokov and Poe." Alexandrov, pp. 463-76.
- Poe, Edgar Allan. *Essays and Reviews*. Edited by G. R. Thompson, Library of America, 1984.
- . *The Short Fiction of Edgar Allan Poe*. Edited by Stuart Levine and Susan Levine, U of Illinois P, 1976.
- Polonsky, Rachel. *English Literature and the Russian Aesthetic Renaissance*. Cambridge UP, 1998.
- Quinn, Patrick F. *The French Face of Edgar Allan Poe*. Southern Illinois UP, 1957.
- Schaub, Thomas Hill. *American Fiction in the Cold War*. U of Wisconsin P, 1991.
- Schiff, Stacy. *Véra (Mrs. Vladimir Nabokov)*. Random House, 1999.
- Smith, Grover. *T. S. Eliot's Poetry and Plays: A Study in Sources and Meaning*. U of Chicago P, 1956.
- Steiner, George. "Extraterritorial." *Nabokov: Criticism, Reminiscences, Translations and Tributes*. Edited by Alfred Appel, Jr. and Charles Newman, Weidenfeld and Nicolson, 1971, pp. 119-27.
- Tanner, Tony. *City of Words: American Fiction 1950-1970*. Harper and Row, 1971.
- Trilling, Lionel. "The Last Lover." *Encounter*, Oct. 1958, pp. 9-19.
- . *The Liberal Imagination*. 1950. New York Review of Books, 2008.
- . *Speaking of Literature and Society*. Edited by Diana Trilling, Harcourt Brace Jovanovich, 1980.
- Urakova, Alexandra. "Breaking the Law of Silence': Rereading Poe's 'The Man of the Crowd' and Gogol's 'The Portrait.'" *Poe's Pervasive Influence*, edited by Barbara Cantalupo, Lehigh UP, 2012, pp. 63-73.
- Wood, Michael. *The Magician's Doubt: Nabokov and the Risks of Fiction*. Princeton UP, 1994.
- 秋草俊一郎「ナボコフとエリオット——「ゲーム」から「モラル」へ、「歴史」から「伝記」へ」『T.S. Eliot Review』（日本 T.S. エリオット協会）第 27 号、2016 年 11 月、52-68 頁。
- 巽孝之「「アナベル・リー」の娘たち——エドガー・アラン・ポーの文学史」『英米小説の読み方・楽しみ方』林文代編、岩波書店、2009 年、61-81 頁。
- 出口菜摘「T. S. エリオットのポー受容」『ポー研究』（日本ポー学会）第 1 号、2009 年、3-17 頁。

(2024 年 10 月 1 日受理)

(ごとう あつし 文学部国際文化交流学科講師)